
Summer Summer

梨音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S u m m e r S u m m e r

【Nコード】

N 1 6 9 0 V

【作者名】

梨音

【あらすじ】

セミ探り、ラジオ体操、そうめん、夏祭り、入道雲に麦わら帽子、そしてあの懐かしい日々 夏のすべてを、詰め込んで。加奈子、じいちゃん、青、三人の夏の物語。

01 (前書き)

わたしの夏を詰め込みます)、)、()
舞台はわたしの祖父母の住む福岡と、わたし自身の住む大阪。
方言だらけになると思います。分からないところなどあつたら遠慮
なく言ってください、

なんだかとっても蒸し暑い。セミがみんな鳴いている。

夏だ。

じいちゃんちだ。

目を開けて飛び起きると畳の上だった。今日も布団から転がり出ていたらしい。それやからカナにはベッド買ってあげられへんねん。そうこぼす母の声が耳の奥でよみがえる。ずいぶんと遠い声。

そうだ、ここはじいちゃんちだ。小言のうるさいお母さんはここにはいないのだ。

「お、カナ、起きたと。ラジオ体操行くね」

その声に振り返ると、じいちゃんが入り口から部屋を覗いて笑っていた。ハゲた頭に麦わら帽子を乗せて、首に白いタオルを巻いている。

「うん！」

返事をしながらパジャマを脱ぎ散らかす。洋服や宿題の詰まったダンボールを漁っていると、入り口から軽く叱る声音が飛んできた。

「ちやつ。どげな格好ばしとつとね」

「パンツいっちょー」

軽快に答えてワンピースをすっぽりとかぶる。全体にひまわりがプリントされたノースリーブのワンピース。いちばんのお気に入り。

「ちょっとトイレ！」

宣言してトイレに行き、出てくるとじいちゃんはもうサンダルを履いて待っていた。私も慌ててサンダルに足を突っ込む。三つもついたマジックテープの一番上のものだけを外して、無理やり足をねじ込んだ。

「ばあちゃんいつてきまーす」

平屋の奥に向かい声を張り上げる。ガラガラつと豪快な音と共に戸を横にスライドさせて開ける。降り注ぐセミの声にアツアツの陽光。私は小学校のある方へと駆け出す。

「飛び出したらいけんよー、じいちゃんから見えるところでおらないかんばーい」

追いかけてくる声に振り返って「分かってるー！」と叫び返した。じいちゃんは鷹揚に頷くと、日焼けした顔を白いタオルで拭い笑った。

私たちが小学校に着いた頃には、もうだいぶ人が集まってきた。私たちは校庭のいちばん後ろのほうに二人並んで陣取ることにした。

横をすり抜けながらちらちらと見てみると、みんな首からラジオ体操のカードをぶら下げている。帰りにハンコを押してもらえやつ。一日も欠かさずハンコが押されていたら、最後の日にごほうびがもらえるやつ。もちろんじいちゃんも首からぶら下げている。持っていないのはたぶん、昨日こっちにやってきたばかりの私くらい。私ができよるきよるしているのに気付いたのか、じいちゃんは、「あとももらえばよかたい」とだけ言う。

ラジオ体操が始まるのは六時半のはずなんだけど、校舎のてっぺんの時計が六時三十二分を指してようやく、「ラジオ体操第一！」の音がスピーカーを通して校庭に響いた。朝礼台の上にはひとの良さそうなおじさんが上り、その左右にも数人のおじさんおばさんが並ぶ。じいちゃんがぐうつと身体を伸ばして、こつちをちらりと振り返った。私はにつと笑い返してぶんぶん腕をふる。

じいちゃんはいつも、背筋を伸ばしてしゃっきりしゃっきり体操をする。私も一緒にしゃっきりしゃっきり。大人の言う「体操すると身体が伸びて気持ちがいい」というのは正直よく分からないけど、ラジオ体操を真面目にやったらじいちゃんみたいにずうつとしゃっきり元気でいれるんだって、私は信じている。だから私は、周りの同級生くらいの子たちが恥ずかしくて真面目にやっけないラジオ体操第二の「元気もりもり」みたいなやつだって、ちゃあんと真面目にやっっているのだ。

02 (後書き)

今日の朝起きたらすぐ近くの小学校からラジオ体操の音が聞こえてきてちよつと嬉しかった(笑)

ラジオ体操第二に「元気もりもり」みたいなやつありますよね！わたしは絶対まじめにやらないタイプです

方言がちやんと伝わっているのか不安。

これから大阪弁も混ざりだすので、どうなんだろう、よく分からなくなりそう。

分からないところあったら遠慮なく言ってくださいな！

じいちゃんと一緒に、むんと胸を張って最後の深呼吸を終える。

終わるとすぐに、みんなぞろぞろとおじさんおばさんのところに群がっていった。今日ラジオ体操に来たという証のハンコをもらうのだ。私も駆けて行こうとすると、じいちゃんが引き止める。

「よかたい。そげん急がんでも」

そのまま上半身を捻ったりして全く動く気配がないので、わたしも仕方なくそこにとどまった。しゃがんで砂に絵を描いていることにする。ワンピースを着た女の子の絵を描こうとしたのにとってもへんで、むしゃくしゃして両手で砂をかき散らしていると、ビーチサンダルを履いた黒こげの足が二本、私の前にぬっと現われた。上から声が降ってくる。

「パンツ見えよるぞ、カナ」

私はさっと足を閉じて三角座りの姿勢になる。できるだけワンピースのすそを引っ張って足を隠しながら、目の前の黒こげ足の持ち主を睨みつけると、そいつはにっと歯を見せて笑った。歯だけが白くてやたらに目立つ。

「うるっさいわハゲ。見んといてーや」

「ハゲとらんばい！ 丸刈りにしよるだけや」

私がハゲという単語を出すと尚貴　ひとつ年上のいとこ　はぶんすか怒って反発してきた。

「だいたいハゲちいうのはじいちゃんのごたつとを言うつとばい。なあじいちゃん」

そう言われてもじいちゃんは特に反論するふうもなくストレッチを続けている。

ふと思いだしたように「一人で来よつとね、ナオは」と訊いた声に応えて、尚貴はまたにっと笑い「偉かる」と頷いた。今日を含めてみっつのハンコがある体操カードを、私に見せびらかすようにか

ざず。

「ほら見てみーカナ。今んとこ皆勤やぞオレは。カナはまだカードも持っとらんとやる」

「うるさいうるさい！ カナは昨日こっち来たばっかやねん、そんなん当たり前や」

「そげなことは知らん」

尚貴は相変わらずにやにやしなからそう言つて、手をタンクトツプにこすりつけて汗をぬぐった。私はだんだんに涙がにじんでくる。悔しくてたまらない。

「いじわるアホ尚貴！ どっか行け！」

半分泣きながら叫んでやると、尚貴は困ったような顔になって私を見下ろした。それでも若干笑っている。

「そうかー。せっかくカナもセミ採りに誘つたるーち思いよつたけど、そげん言うならやめるわ。じいちゃんも兄ちゃんも一緒に行くけどカナはお留守番なー」

「そんなんひどいわ！ 行く行く行くカナも行く！」

今度こそ本当の泣き声になって私は尚貴に訴える。尚貴はまたにやにやした。

「昼食べたらじいちゃんち行くからな、用意しとけよ。泣くなや泣き虫」

「泣き虫ちゃうわー！」

「そしたらその目から流れよるのは何よ」

「もう！ 黙れハゲ！ どっか行け！ 帰れ！」

尚貴が校庭からぶらぶら出て行くと、「カナ、カードもらいに行くか」とじいちゃんが私を呼んだ。わたしは立ち上がってワンピースの砂を払う。大またのじいちゃんに小走りになりながらついていていると、じいちゃんが私をうかがって苦笑した。

「いつからそげん威勢の良くなつとつたと」

「知らん。大阪みんなこんなんや」

むすつとして答えると、じいちゃんはまた笑って前を向いた。

03 (後書き)

分かるのかなあ大阪弁と博多弁。

分からなかったら言ってください、

博多弁、普段祖父母としか話さないのでも子供がどのくらい訛るのかよく分からない(´、´)

わたしもひとつ年上のいところにいるんですけどね。軽く五年しゃべってないです

不安なので「ばってん」は「けど」に変えました。博多弁で「だけど」は「ばってん」と言うのです。

それからどこで切ればいいか分からなくてずいぶん長くなってしまいました、

「あら、高橋さんとお孫さん？」
「そうです」
「まーかわいらしい」
「加奈子ちゃんちいいよったつけ？ 今いくつ？」
「小三です」
「小三いうたらうちの子と一緒にたい」
「まあこげんしつかりして」
「ここまで一人で来たと？ どこから来たかね」
「大阪です。一人で」
「一人で飛行機やらなんやら乗って大阪から？」
「えっと、空港まではお母さんとかに送ったりしてもらったけど」
「ほいでも偉かよねえ。大阪の子は一人で長旅出来るとよ」
「ほんなこつ」
「こげなとこ来たつちや暇やろ？ 加奈子ちゃん」
「全然暇じゃないです。楽しいです」
「そげんゆうたつちやなんもなかる。福岡は」
「そんなことないです。いろいろあります」
「まーカナちゃんやないの！ 久しぶり！ 覚えよる？ カナちゃんのお母さんのお友だちよ」
「こんにちは。あの、カード、」
「ああカードね！ 福岡まで来てラジオ体操ちや偉かねえカナちゃん。はい。オマケで昨日と一昨日のぶんも押しといたよ。お母さん一緒に帰ってきよる？」
「お母さんは仕事あつて来れませんでした」
「そうかー。でもまたお正月に来るもんね。いつまでおると？」
「まだ決まっていけないけど八月の二十日くらいまで……」
「そげん長いこと」

「一ヶ月近くおるとたい」
「頑張つて皆勤してねえ」
「一回くらい休んだつちやおばちゃんがハンコ押したげるけどね」
「あの、えっと、じいちゃんが呼んでるので……」
「ああごめんね。そしたらまた明日」
「カード忘れんようにねえ！」

おばさんたちのおしゃべりと笑いの輪から抜け出すとずいぶんほつとして、私はじいちゃんに駆け寄った。近づく私を見て背を向けゆっくり歩き出すじいちゃん。小走りで隣に並ぶ。

「今何時？」

校門を出て、ふと思いついて尋ねてみる。道の脇に生えている木の一本一本ではいちいちセミが鳴いている。みんなやらじーじーやら、うるさいったらない。

「七時ぐらい思うばってんが」

みんなの間にじいちゃんの声が挟まって、見上げるとじいちゃんも見上げていた。太陽のほうに首を巡らしている。

「太陽の場所で時間が分かるん？」

驚いて尋ねると、いや分からん、とじいちゃんはあっさり首を横に振った。

「分からんばってんばあちゃんが朝ごはん作って待ちよるよ。早よ帰らないかんばい」

そう言つて、つばの広い麦わら帽子の下で顔を綻ばせ私を見下ろす。

「カナちゃん、家まで競走たい」

オツケー分かったよーいどん！ 勝手に叫んで走りだす私を、じいちゃんはゆっくりと追いかける。民家と田んぼに挟まれた田舎道には、さまざまなセミの鳴き声が溢れている。すべてに対して平等に力強く照りつける太陽は、私の夏を祝福してくれている。

「じいちゃんおそーい！」

遠く離れた麦わら帽子に向かってそう声を上げてから、私はお味噌汁の匂いが漂う家へと駆け込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1690v/>

Summer Summer

2011年10月2日03時25分発行